

1 圃場準備 ～育苗管理

～活着の良否が生育を左右する～

① 本圃の準備は早めに

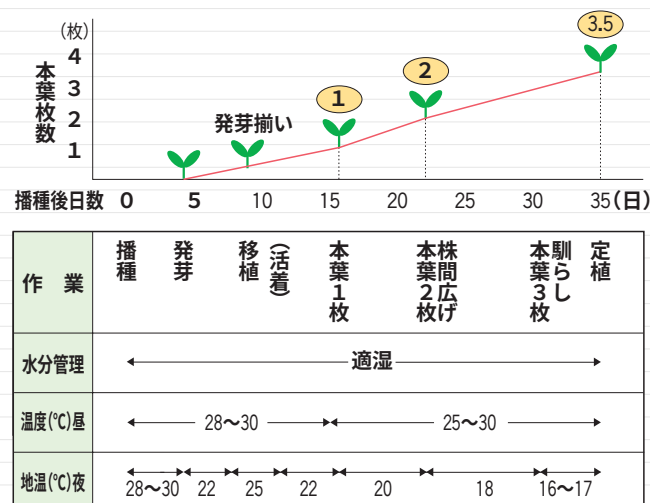
メロンの着果節位の雌花は定植後まもなく分化してくるため、スムーズに活着させ、初期生育を順調に進めることが大切です。そのためにも定植時の地温(地下15cm)は18℃(少なくとも16℃)を確保することが重要で、ハウスの早い作型では畝立てを遅くとも定植の15～20日前には済ませ、ハウス、トンネルを密閉して地温の確保に努めます。つまりは、定植時の地温が確保できないような播種期の設定は行うべきではありません。

また、メロンは浅根性の作物であるため、心土に水分が十分にあることが重要です。乾燥しているような場合は灌水チューブなどで十分に灌水し、土壌水分が適湿の状態での畝立てをします。

② 苗姿は活着に大きく影響する

定植後の活着には苗質も大きく影響します。そのため、温度・水管理に注意することは当然ですが、寡日照期の育苗になるため、光が十分に当たるように管理することが大切です。特に、本葉同士が重なりあう前に必ず「株間広げ」を行い、徒長のないがっちりした苗に仕立てます。なお、定植前には本圃の条件に合うように「苗の馴らし」を行い、定植に備えます。

メロンの育苗管理



大玉で品質のよい メロンの出荷を！

地這いメロンの 栽培技術管理

～パンナ、レノンの早出し管理～



タキイ研究農場
堀井 清史

近年、ハウス栽培の普及により、作型の前進化が進んでいます。無加温での栽培になるため、その年の天候によつては小玉になったり、品質にばらつきが出たりすることもあります。また、流通面においては、長引く経済不況によるメロン消費の減少やほかの果物との競合などもあって、価格の低迷が続いています。

このような中、単に早く出荷するメリットを追及するのではなく、当たりはずれがなく、消費者に感動を与えるメロンの生産が求められていると考えます。ここでは、極端な早まきはおすすりませんが、ハウス早出し栽培の中で、大玉で品質の安定したメロンを生産するための基本的な栽培技術を解説いたします。

2 定植～着果期までの管理

～良品出荷は株作りがカギ～

① 交配まではじっくり生育させる

低温期の栽培では、内張りカーテンや内トンネルなど多重被覆の栽培となり、日照不足になりやすいため、被覆資材の開閉を徹底し、光を十分に当てることが重要になります。高温多湿で管理すると、地上部の生育が進み、葉が薄く大きくなり、生育後半の草勢低下につながります。昼間の気温は28～30℃で管理しますが、この時期はハウス内の温度が上がっていても外気温は低い状態なので、一度に大きく換気することはせず、冷たい風が直接当たらないように注意します。

灌水は根張りを重視し、交配までは極力控えます。ただし、結果枝が弱くなると思われる場合（結果枝が3～5cmの時に、第1葉より雌花が大きく目立つ状態）は、結果枝が伸び始める時期に晴天が続く日をねらって灌水し、草勢を回復させます。交配直前の灌水は、着果不良や花落ち部が大きくなる原因になるため控えます。逆に、結果枝が伸び始めの時期に、雌花より第1葉が大きい場合は、草勢が強く雌花の充実が心配されるので、灌水は控え、光を十分に当てるよう心掛けます。



↑直接、植物体に冷たい風を当てないため、朝一気に大きく開けるような換気はせず、小さく開けた後、換気量を調節する。



↑第1葉より雌花が大きいこの状態では、結果枝が弱くなると思われるため、晴天が続く時をねらって灌水する。

ハウス内の生育状況



↑被覆資材の開閉が徹底され、日光が十分に当たるハウス。



↑被覆資材の開閉が不十分なハウス。



↑被覆資材の開閉が不十分な状態で栽培すると、日照不足になり、軟弱徒長気味に生育する。

2 定植～着果期までの管理

② 十分な株ができた状態で着果させる

地這い栽培で品質を安定させるためには、生育を揃えることが前提となります。誘引法には振分け誘引とオールバック誘引がありますが、振分け誘引では栽植株数は多くなっても、ハウスの中央とサイド側で生育差が出やすいため、オールバック誘引をおすすめします。

着果節位は12～15節を基本としますが、低温期の栽培や初期生育が順調に進まず草勢が弱い場合は、節数にこ

だわらず着果節位を上げ、十分な株ができた状態で着果させるようにします。正常な生育をしているかどうかは、茎の途中から太くなり、開花時に結果枝の第1節までの長さが20cmを確保していることが目安になります。短い結果枝に着果させてしまうと、肥大不良や扁平果の原因になるため、着果節位を上げ、灌水などをして草勢を回復させる必要があります。

着果のタイミング



↑ 茎の途中で太くなってから、着果させることが重要。



↑ 開花時に、結果枝の第1節目までの長さが20cm確保されている状態が理想。



↑ 結果枝が短く、弱い状態で開花させると、果実は大きくなりにくく、扁平果になりやすい。

3 着果後の管理

～初期肥大を順調に進める～

① 交配後の整枝は極力避ける

充実したよい雌花を開花させることが、着果や初期肥大を順調に進めるのに重要です。そのため、着果節位までの側枝は早めに除去し、交配2～3日前には子づるの先端を25節前後で摘芯します。同時に、着果節位以降の側枝も子づるの先端3本程度の側枝を「遊びづる」として放任する以外は除去します。交配前に先端を摘芯することにより、雌花の充実が図られ、咲き上がりも早くなるため、同時着果しやすくなります。

このように、交配までに必要な整枝は済ませ、肥大期の整枝は極力避けるようにします。摘果時に着果節位以降の長く伸びた側枝を一度に整枝すると、株にストレスがかかり、遊びづるの伸びが緩慢になることがあるため注意します。

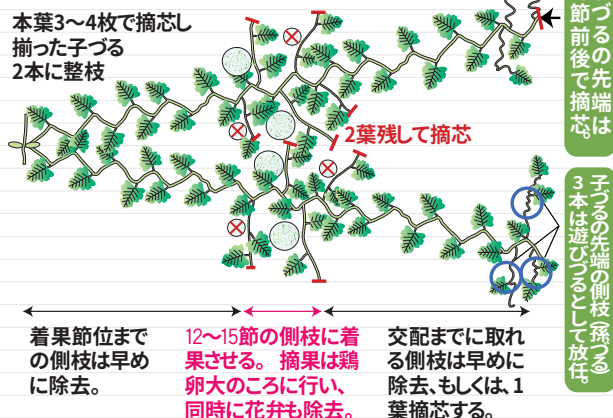
② 灌水のポイントと温度管理が重要に

交配前からは夜間の温度を高めに管理して、莖葉をやわらかめに保ち、着果や初期肥大に備えます。着果確認後は、摘果期がピークになるよう灌水を開始し、ネット発生期は水分過多にならないよう、圃場の水分を調節します。

また、この時期はやや高めの温度管理で初期肥大と縦伸びを促進しますが、蒸し込んだ管理を続けると果実が極端に緩み（果皮が濃緑色）、ネットが粗くなることもあるため注意します。

地這いメロンの仕立て方

地這いのネットメロンは子づる2本仕立ての4果収穫。
(1つる2果)



4 ネット発生期の管理

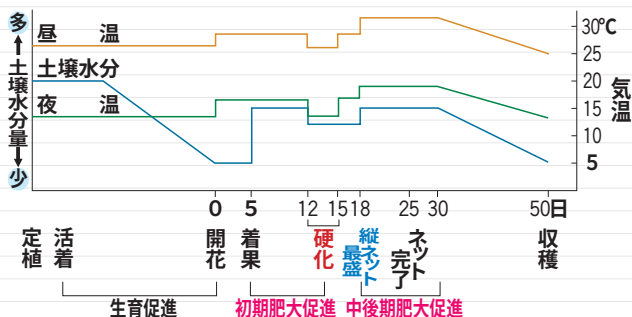
～果実のしまりすぎに注意～

ネット発生期は灌水を控え、冷たい風が直接当たらないように注意します。特に、草勢が強い状態で低温に遭遇すると、果実がしまりすぎて（果皮が白くなる）大割れネットが発生しやすくなるため、夕方早めに保温し、夜温確保に努めます。朝方の蒸らしや灌水は厳禁です。

横ネットが出始め、ネットが全面に回りだしたころからは、温度による大割れネットの発生はなくなるので、朝夕高めの温度管理を心掛け、果実の緩みを促進します。

果実の緩みを確認できれば、再び灌水を開始して、温度管理と併せて肥大とネットの発生を促進します。ただ、果実がしまりすぎていると、朝夕高めの温度管理をしても果実が緩んでこないため、灌水を控えて、特に朝方の蒸しこみ管理を強め、草勢を抑制して果実の緩みを促進します。ただし、極端な蒸しこみ管理を長く続けると、生育後半の草勢低下の原因になるため注意します。

ネットメロンの定植後の管理



← ネット発生初期に果実がしまりすぎると、果皮が白くなり、大割れネットの発生が心配される。

5 果実肥大期の管理

～ムラのない灌水を心掛ける～

果実の緩みを確認した後は、ムラのない灌水を心掛け、温度管理と併せて肥大とネットの発生を促進します。灌水は、遊びづるの伸びを参考に調節しますが、遊びづるはネット発生期は伸びにくく、灌水を開始したころより伸びてくるのが正常です。遊びづるの伸びが悪かったり、葉色が抜けてくる場合は、灌水量を増やしたり、葉面散布するなど早めに対応して草勢を回復させます。

果実肥大がほぼ完了するころからは換気を強めます。また、灌水を控え、糖度の上昇を促しますが、あまりに極端な水切りはせず、株の状態を確認しながら徐々に減らし、後半の草勢維持に努めます。生育後半の換気不足は草勢の低下や糖度不足、果形の乱れの原因にもなるので注意します。

遊びづるで判断する草勢ポイント



← 果実肥大期に遊びづるの生長点が小さくなったり、生長点付近で雄花が多く咲きだすと、草勢が弱い状態。



← 収穫期になっても、遊びづるの伸びが衰えない時は草勢が強い状態。熟期遅れや裂果の原因になるため注意する。